

編集後記

本誌（第七五号）民具特集号の冒頭に「民具は収集されただけでは意味が薄い。解説がなければ一般の人々には民具の理解は困難である」と記されている。今回も民具の解説を特集したが、これを機会に多くの民具研究者が輩出することを期待したい。前回より解説点数が少ないのは、写真を入れるため誌代が高くなるのを考慮した為である。ご要望が強ければ、続編を出してもよいと思っている。

染矢多喜男先生の「米水津村小浦の民俗」は、本県では比較的数少ない県南部の調査報告である。雑誌「民間伝承」等に部分的な報告は散見するが、まとまったものはない。県教委の報告書「米水津村宮の浦の民俗」に匹敵する詳細な労作なので、全部を掲載した。民俗調査の方法や報告書の書き方など学ぶべき点が多いと思われる。

大隈米陽氏の「加来飛霞研究の現状」も力作である。近年識者の間で漸く高まりつつある加来飛霞への関心が一層高まるものと期待されると同時に、氏の烈々たる郷土愛が行間にもなぎっているのを感じる。

久米忠臣氏の報告は杵築郷土史研究会の新発足以来の足跡

を概括したものである。県下の各地で史談会・研究会の活動が行なわれているが、本誌にも近況を寄せていただきたいものである。なお、会員便りは事務局に寄せられてなかったの、今回は割愛したが、一人でも多く多彩な顔ぶれが登場することを願っている。進んでご投稿をお願いしたい。

本号の校正を手がけていたら、中津市に「中津の郷土史を語る会」、宇目町に「宇目町史談会」が発足した情報を得たので転載させてもらうことにした。会のご発展を祈るとともに、本会へのご協力もお願したい。

前号で新刊紹介をしなかったため、今回は六編を加えた。本県に在住しない著者の分も県関係の歴史書は紹介してゆきたいので、書評などふるってお寄せいただきたい。

なお、ご寄稿に際しましては、史料や固有名詞以外はなるべく当用漢字を用い、送りがなを正しく付けて下さるようお願いいたします。

（小玉）